7　中世大友府内町跡　第 124 次調査（報告）

調査面積　14 ㎡　　調査期間　17.03.16 ～ 17.03.17
地域　A　　調査担当　池邉千太郎・留野優兵・福永素久

1. 調査の概要

調査地点は大友氏遺跡の 1 つである推定御蔵場跡であり、国指定史跡として今後保護を要する範囲内にあり、その最も東端に位置する。これまで推定御蔵場跡周辺では、過去に中世大友府内町跡第 86・89・115・116 次調査が行われている。今回の調査地点の東側に隣接した第 89 次調査では、御蔵場の東端を区画する南北方向の溝状遺構を検出している。

今回の調査は個人住宅の浄化槽設置に伴う確認調査であり、3 本のトレンチを設定して調査を行った。

調査の結果、中世のピットや溝状遺構、土坑が検出された。

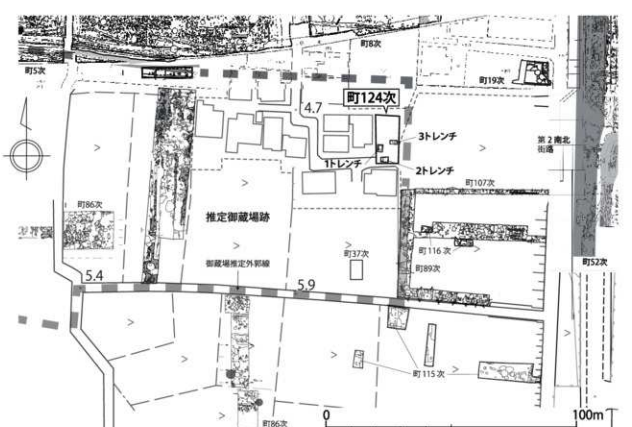
第 28 図　調査地点位置図（1/5000）

【1 トレンチ】

1 トレンチは南北 2.7 m×東西 1.9 m、面積 5.1 ㎡を測る。水田層直下の標高 4.6 m で安定地盤を確認し、その表面から遺構を検出した。遺構としては、ピットと溝状遺構、浅いたまり状の遺構が検出されている。溝状遺構 S003 は、調査区北壁に接して調査区外にも展開しており、全体の形状は把握できない。断面形状は東側に浅いテラスをもつ逆半円形で、土師器の破片が出土している。時期は出土遺物から中世のものであると考えられる。ピット S002・004 は直径 0.2 ～ 0.3 m、深さ 0.15 m を測る。S004 からは柱の根石と考えられる石材が出土している。

【2 トレンチ】

2 トレンチは南北 1.9 m×東西 2.7 m、面積 5.1 ㎡を測る。標高 4.6 m で安定地盤の明茶黄色砂質土を確認し、その表面からピット S001 を検出した。S001 は直径 0.2 m、深さ 0.2 m を測り、ほぼ完形の在地系土師器坏 A が出土



第 29 図　御蔵場推定地調査区位置図（1/1500）

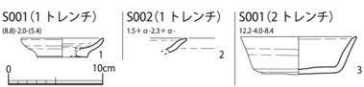
している。出土遺物から 15 世紀前半～中頃に属すると考えられる。溝状遺構である S002 は、2 トレンチの東側を南北につらぬいて検出された。土層から S002 は安定地盤の上層に堆積する水田層を掘り込んでいることがわかった。遺物が出土していないため時期は特定できないが、近世以降のものであると考えられる。

【3 トレンチ】

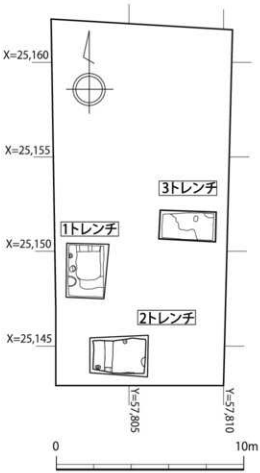
3 トレンチは調査対象地の東端に設定した。南北 1.4 m × 東西 2.7 m、面積 3.8 ㎡を測る。標高 4.5 mで安定地盤が確認でき、遺構はその表面でピットが検出されている。第 89 次調査で確認された南北方向の溝の続きは確認できず、調査対象地内を通っていないと考えられる。

2．まとめ

今回の調査では中世大友府内町跡第 89 次調査で確認された南北溝の続きは確認されなかった。また、遺構の密度は東側に展開する柳町での調査事例に比べると希薄であることから、町屋の様相とは異なっており、御蔵場内側の状況を示すものと考えられる。（池邉）



第 30 図　出土遺物実測図（1/4）



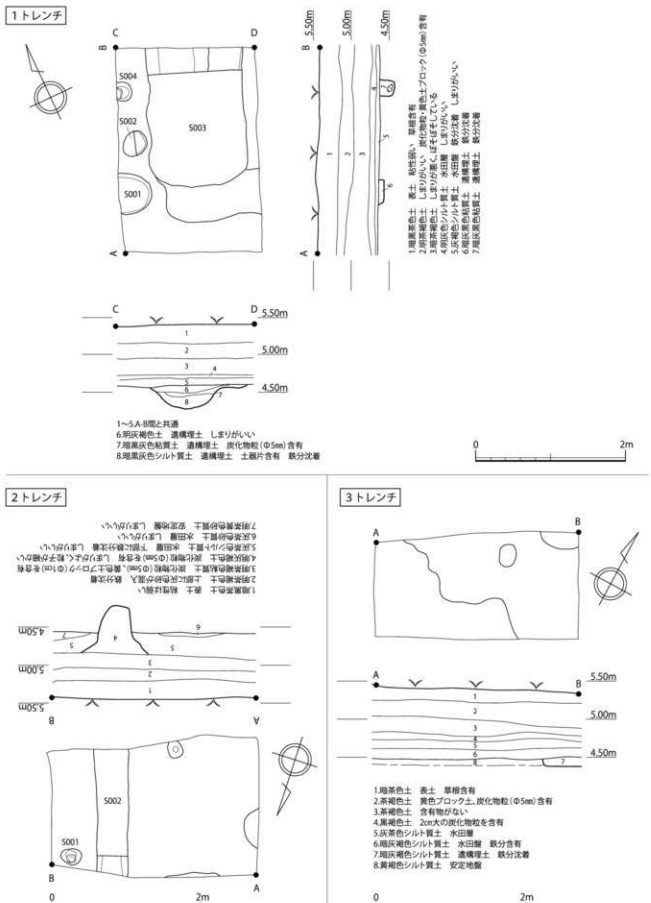
第 31 図　トレンチ調査区位置図（1/200）

1 トレンチ掘り下げ状況（北より）

1 トレンチ S003 土層断面状況（南より）

2 トレンチ S001 遺物出土状況（北より）

3 トレンチ北壁土層断面状況（南より）



第32図　平面図・土層模式図（1/50）

8　府内城・城下町跡　第 26 次調査（報告）

調査面積　50 ㎡　　調査期間　16.7.28 ～ 16.11.15
地　　域　A　　調査担当　塩地潤一

1．調査の経緯・立地と環境

調査地は大分市荷揚町に位置し、近世府内城の西之丸の一角、現在は県指定文化財となっている宗門櫓の北側にあたる。調査は古絵図にある宗門櫓から北側に延びる石垣の範囲確認を目的に行ったものである。

今回の調査は宗門櫓の北側に 6 m四方の 1 トレンチを設け、その 1 m北側に幅 5 mの 2 トレンチ、さらに 5 m北側に 3 トレンチの計 3 つのトレンチを設定して行った。

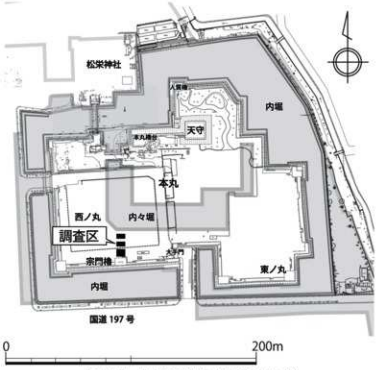
調査の結果、2 トレンチと 3 トレンチでは、昭和 41 年に建設された文化会館が平成 25 年に解体され、基礎部分が壊されたため、遺構は認められなかった。1 トレンチからは、現存する宗門櫓の石垣につながるように 1 m程の自然石が 2 列並んで検出され、その間に人頭大の石（栗石）が詰められた状態で確認された。この宗門櫓につながるように発見された石垣は根石と考えられ、櫓の石垣の下へとつながっている。また、自然堆積層の上に重なるように整地土層が認められ、出土遺物から盛土整地が 16 世紀末頃の築城段階のものであることが判明した。

第 33 図　調査地点位置図（1/5000）

【構造】1m 程の自然石を 2 列にならべ、その間に人頭大の石（栗石）をつめた構造である（第 37 図　平面図）。幅は約 3.5 m、南北の長さは約 5 mの範囲につくられており、大分大学学術情報拠点（図書館）所蔵の「府内城下町絵図」には、幅 1 間 4 尺（約 3.3 m）、長さ 9 間 2 尺（約 18 m）とあり、今回の調査で検出した石垣の幅は、ほぼ絵図どおりであることがわかった。北側に延びる石垣（根石）の配置は、1 トレンチ北側よりさらに続いていたものと考えられる。

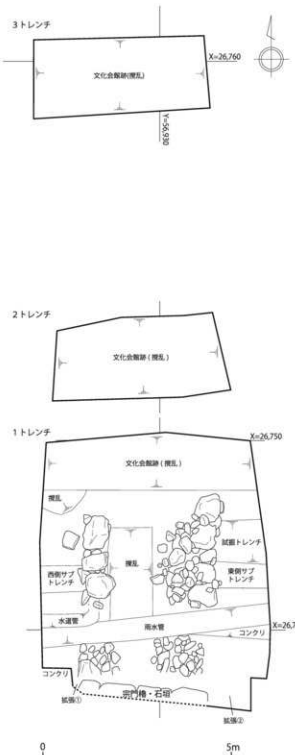
【用途】今回検出された石垣は、宗門櫓の建物につながる石垣そのものと、江戸時代の終わり頃に書かれた歴史書『豊府指南』にある出合曲輪と西之丸を仕切る石垣（出入口の一部）であることが判明した。

出合曲輪は東之丸と西之丸の間にあり、大手口郭下橋から多門櫓（大手門）を入って最初の曲輪で、敵の侵入を防ぐ重要な施設となっている。

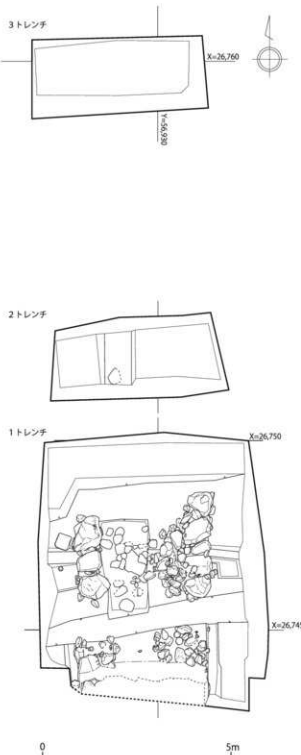


第 34 図　府内城内調査区位置図（1/3000）

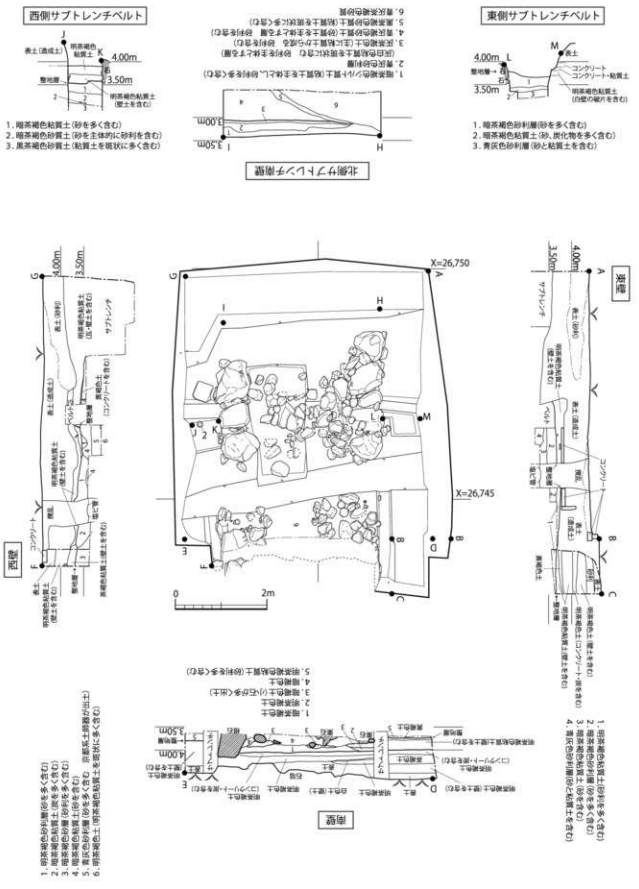
石垣の下部には自然堆積の砂層の上に土を盛り整地が行われ、その土層観察から大きく上下 2 層にわかれる（第 37 図　西側サブトレンチベルト 1・2 層）。これらの層は下の砂質土の上面に根石を置いて、上の粘質土で石を固定していることがわかった。砂質土からは京都系土師器皿などがまとまってみつかっており、形状から 16 世紀末頃のものと考えられる。これは府内城・城下町跡第 8 次調査成果によって 1605 年（慶長 10）に完成した府内城下町跡の整地からみつかった京都系土師器皿の形状や、皿の器厚とは大きく異なっており、器厚がやや薄手の特徴を有する。中世大友府内町跡や近世の府内城・城下町跡の各所で行われた調査成果により、京都系土師器の年代がかなり細かくわかるようになってきている。こうしたことから、遺物の年代により府内城築城による整地が 17 世紀直前に開始されたことが明らかとなった。



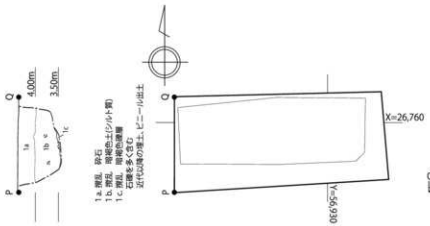
第35図　遺構配置図（1/100）



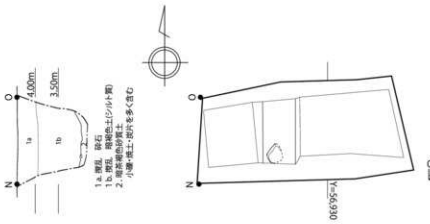
第36図　遺構全体図（1/100）



第 37 図　1 トレンチ平面図・土層断面図（1/80）

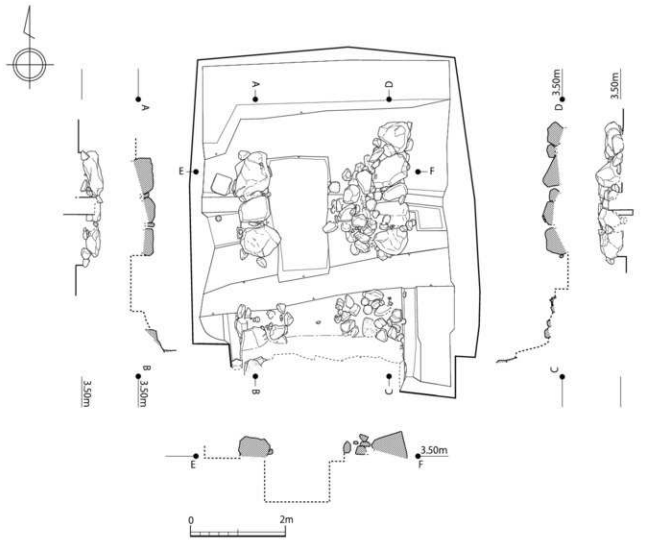


第 38 図　3 トレンチ平面図・西壁土層図（1/80）



第 39 図　2 トレンチ平面図・西壁土層図（1/80）

調査区全景（左手に宗門棹・上が西）



第 40 図　1 トレンチ石垣の横断図・立面図（1/80）

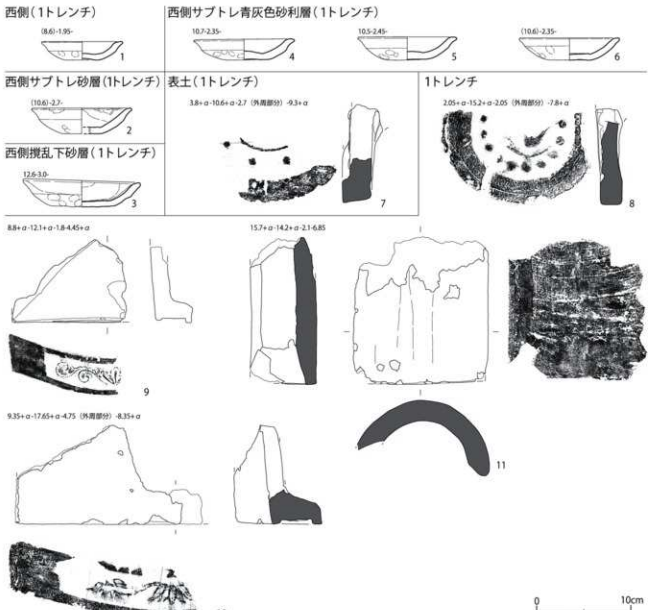
なお、確認された根石や栗石上面を覆う埋土（第 37 図　南壁の 1 層より上層）は明治～昭和にかけて堆積したものであることがわかった。

2. まとめ

今回確認された根石は、宗門櫓の 2 階につながる石垣部分の基礎にあたるもので、幅は約 3.5m あることがわかり、絵図の寸法（1 間 4 尺）と合致するものであった。石垣の根石列の長さは約 5m 分が検出され、その北側については攪乱によって確認はできなかった。これらの遺構の状況と絵図から読み取れる情報から、この石垣の根本は府内城西之丸と出合曲輪を仕切る出入口の一部と判断される。また、根石のある部分には 16 世紀末段階の整地がみられ、府内城の築城開始が 1597 年（慶長 2）で、『豊府聞書』（戸倉貞則が 1699 年に著わす）の記述と一致していることも確かめられ、今回の発見はこれを裏付けるものとなった。（池邉）

1 トレンチ全景（南より）

1 トレンチ全景（北より）



第 41 図　出土遺物実測図（1/4）

1トレンチ西側サブトレンチ
北面土層堆積状況と遺物出土状況（南より）

1トレンチ北側サブトレンチ
南面土層堆積状況（北西より）

9　羽田遺跡　第 14 次調査（概要）

調査面積　432.5 ㎡　　調査期間　16.10.3 ～ 16.12.16
地域　A　　調査担当　松浦憲治

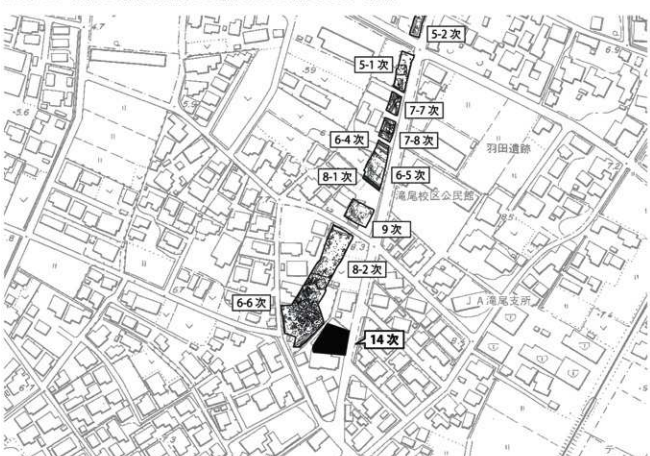
1. 調査の経緯・立地と環境

第 14 次調査地点は平成 21 年度に行われた羽田遺跡第 6-6 次調査区の東側隣接地である。調査面積は 432.5 ㎡である。現地表面から約 1.0 mの表土、約 0.3 mの近現代水田層の下位に黄褐色シルトの自然堆積層が存在する。黄褐色シルト層の上面で遺構を検出した。遺構検出面の標高は 6.6 ～ 6.7 mである。

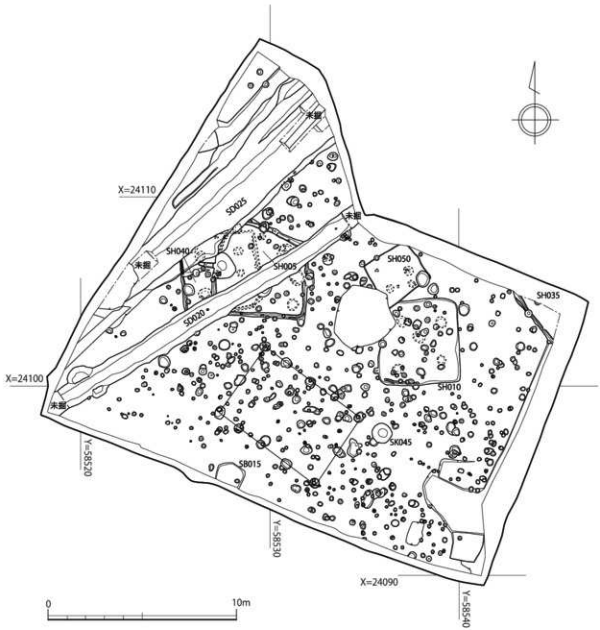
第 42 図　調査地点位置図（1/5000）

2. 調査の概要

調査の結果、弥生時代終末から古墳時代の竪穴建物跡や、9 世紀代の掘立柱建物跡、13 世紀代の井戸跡、溝状遺構のほか、16 世紀後半の溝状遺構を確認した。竪穴建物跡は中央に炉跡をもつ弥生時代終末期の竪穴建物跡 1 基と、4 世紀～ 7 世紀の竪穴建物跡 4 基が確認され、弥生時代から古墳時代にかけて連綿と竪穴建物が建てられていたとみられる。そのうちの SH005 ではカマド跡が確認できた。カマドでは廃絶時に長頸壺と台付鉢の鉢部を組み合わせて逆位で埋置している状況が確認されており、廃絶時のカマド祭祀と考えられる。9 世紀代の掘立柱建物跡は 2 間 × 4 間の規模で、古代の遺構はこの掘立柱建物跡のみであるが、13 世紀代の溝状遺構から石帯巡方が出土しており、関連性がうかがわれる。また、6-6 次調査区で確認されている SD120 の続きが確認できた。時期は 16 世紀後半であるが、現在の地割と方位を同じくしており、この時期から現代まで踏襲する地割であると確認できた。（松浦）



第 43 図　周辺調査区位置図（1/2500）



第 44 図　遺構全体図（1/200）

調査区全景（南より）

SH005 完掘状況（東より）